

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

| | | | | | |
|----------------|---------------------------------|--|----------------|----------------------------------|---------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 | | | 文学 研究科 | 日本文学 専攻 |
| 指導教員 | 所属・職名 | | 氏 名 | | |
| | 立教大学文学部教授 | | 小 峯 和 明 印 | | |
| 自然・人文の別 | 自然・ <input type="checkbox"/> 人文 | | 個人・共同の別 | <input type="checkbox"/> 個人・共同 名 | |
| 研究課題名 | 院政期歴史物語の研究 | | | | |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | | 氏 名 | | |
| | 文学研究科日本文学専攻 博士後期課程1年 | | 高 野 慎 太 郎 印 | | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | | 氏 名 | | |
| | 立教大学大学院文学研究科 日本文学専攻博士後期課程1年 | | 高 野 慎 太 郎 | | |
| 研究期間 | 2006 年度 | | | | |
| 研究経費 | 200 千円 | | | | |

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では古代と中世の過渡期である院政期を対象として、歴史物語を中心としたテキストから院政期の時代論を展開することを目的とする。もう少し具体的に述べるならば、院政期に成立したテキスト、また12、3世紀を語るテキストを総体的に検討することで、11世紀後半から12世紀の代名詞とも言える「院政期」がいかなる時代で、どのように認識されてきたのかを明らかにしたい。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[院政] [歴史物語] [今鏡]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では『今鏡』を中心として院政期の〈語り〉について考察を試みた。『今鏡』は『大鏡』の語り手、大宅世継の孫娘である老女を語り手として、後一条天皇万寿二年(一〇二五)から高倉天皇嘉応二年(一一七〇)までの約百五十年間を叙述した歴史物語である。これまで〈語り〉の問題は多く論じられてきたところであるが、本研究では、他作品の語り手と比較しながら、『今鏡』の語り手の特徴をおさえ、ひいては『今鏡』の成立当時である院政期の〈語り〉の一側面を考察した。『今鏡』は先行する『大鏡』を継ぐものとしながらも、『大鏡』と異なり、語り手を老女に設定しているのはなぜか。その性差や身分の設定は〈語り〉の内容に直接影響を与えるものとして看過できない。『大鏡』は鏡物の嚆矢として後に続く鏡物の語り場や語り手に影響を与えたとの認識もあるが、『大鏡』以外の鏡物の〈語り〉には女房や老尼といった女性の介在が顕著な点を見ると、むしろ『大鏡』の〈語り〉の方が特異であるといえるのかもしれない。また、歴史物語のみならず一二〇〇年頃に成立したとされる『無名草子』が女房と老尼の対話形式をとっていることも考え合わせると、院政期の〈語り〉には女性がその担い手として重要な位置を占めていたといえるのではないか。また、本研究で考察する〈語り〉や〈語り場〉は、後に続く「説話の時代」へとつながるとともに、歴史物語や説話というジャンルを超えて言説を生む空間としての機能があったのではなかろうか。

『今鏡』の序文を読み直すと女性の語り、奈良への指向という特徴が見出せる。序文においては『今鏡』の語り手の特徴が明らかにされる。「弥生の十日あまりのころ」長谷詣のついでに寺巡りをする一行が木陰で休んでいると女童を伴った老女に遭遇する。それが『今鏡』の語り手となる老女である。その容貌は、年老いて歯が抜けた女で杖に寄りかかったとあり、相当の老いを感じさせる。また、その年齢は「もとは都に百年あまり侍て、その後、山城の狛のわたりに五十年ばかり侍き」とあることから百五十歳を超えていることが分かる。そして、その出自は『大鏡』の語り手である大宅世継の孫娘で紫式部に仕えていたという設定になっている。この語り手の設定は、『今鏡』末尾の「つくり物語の行方」と併せて見ることで、紫式部、『源氏物語』への憧憬と捉える見方が多くの先学によってなされており、『今鏡』の語り手の一つの特徴としては首肯すべき点である。それに加えて注目しておきたいのが、その語り手の老女が伴う女童である。序文において「花がたみにさわらび折り入れて、臂にかけた」と描写されている。これに類似する描写として指摘できるのが『無名草子』の聞き手の老尼に関する記述である。『無名草子』は一二〇〇頃に成立し、一般に物語評論のさきがけとして注目される作品であるが、『無名草子』の聞き手についてまとめると、八十三歳を過ぎた女性が花籠をひじに掛け花を摘んでいる、その女性は崇徳院から高倉院の御代まで宮仕えをしていた。『今鏡』の語り手の記述と比較すると、『無名草子』の聞き手の老尼は『今鏡』の語り手の老女とそれが伴う女童のイメージを同時に持ち合わせていることが分かる。鏡物に『無名草子』を加えた五つの作品の語り手、聞き手・筆録者、語り場についてみると〈語り〉の多くに女性が関わっていることが注目される。本研究では特に、この〈語り〉における女性の存在に注目した。

研究成果の概要 つづき

『今鏡』の語りの場とはどのような場であったのか。序文を読み返してみると、長谷詣のついでに寺めぐりをしようと思い、休憩のために足を止めたのが、語り手である老女の住む春日野であった。この春日野が『今鏡』の語りの場になるわけだが、従来この序文の部分には、『伊勢物語』冒頭の「初冠」の段が踏まえていると指摘されてきた。もちろん『今鏡』の『源氏物語』への意識から考えれば、当然『伊勢物語』も認識のうちに存在していたと思われるが、これに加えて新たに指摘しておきたいのは、『万葉集』への意識である。『万葉集』の一番歌、雄略天皇の歌は、雄略天皇が自らの統治する国を誇るとともに女性に求愛する歌である。「泊瀬」という場、また籠を持ち菜を摘む女性の姿は、まさしく『今鏡』の序文のイメージと合致するところが多いように思われる。『今鏡』では『伊勢物語』について直接言及することはないが、逆に『万葉集』については、巻十「うちぎゝ」の中の〔ならのみよ〕において、その成立などに触れている。また、『今鏡』の語り手の老女が伴っている女童の菜を摘む行為は、春日野という地名とともに和歌に散見され、『俊頼髓脳』に述べられるように、根を引くことが、「千年を過ぐ」、つまり長寿への言祝の意味が込められていると思われる。こうした歌への意識も『今鏡』の語りの方に方向性をつけていると考える。

『今鏡』の聞き手である女房の一行は長谷詣のついでに寺めぐりをするために春日野に立ち寄る。この背景にあるのは南都七大寺巡礼であると考えられる。七大寺巡礼は大江山通親が嘉承元年、一一〇六年の巡礼を記した『七大寺日記』、同じく保延六年、一一四〇年の巡礼を記した『七大寺巡礼私記』、実叡が建久二年、一一九一年の巡礼を記した『建久御巡礼記』によってその詳細を知ることができるが、特に『建久御巡礼記』は『古事談』『宇治拾遺物語』といった説話集との関連も指摘され、中世を読み解く上でも注目されるべきテキストである。その『建久御巡礼記』の巡礼との関係で注目されるものとして『殷富門院大輔集』が挙げられる。二五〇番歌以降二六一番歌までの十二首が七大寺巡礼を詠んだ歌になっている。この巡礼が南都焼き討ちの以前か以後かという問題は論の分かれるところではあるが、いずれにせよ〈巡礼記〉と呼ばれるテキスト群が成立するような時代背景、すなわち奈良への関心の高まりは『今鏡』からも読み取ることができる。また、同じように奈良への関心を物語っているのは、同じく『殷富門院大輔集』の二三四番歌以降二四三番歌までの一群である。ここでは院政期における『万葉集』の再発見による人麻呂信仰の様相を知ることができる。『今鏡』においても巻十「うちぎゝ」の〔ならのみよ〕の中で『万葉集』とその時代について論じられている。このように老女に伴う女童、長谷詣のついでに寺めぐりをする途中立ち寄った春日野という場は、『今鏡』の歌語への意識、また奈良への指向を反映したものであることが指摘できるかと思う。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ④ 第38回 立教大学日本文学会大会 口頭発表
2006年7月1日(土) 於立教大学7号館
題目「院政期における〈語り〉の一側面—『今鏡』を中心として—」